

小学校における古典への学習意欲を喚起する授業づくり

～5年生実践「心に響く古典を表現しよう」より～

湯浅 明菜

5年生以前にも、和歌や昔話など古典に触れてきた子どもたち。しかし、5年生の教科書では、「竹取物語」「平家物語」などが教材として取り上げられており、中学、高校と続く古典文学の学習との出会いとも言える。声に出して読むことに抵抗を感じている高学年の子どもたちが、声に出して古典作品に親しむことができるような実践を行った。単元名を「心に響く古典を表現しよう」とし、(1)グループによる音読、(2)ICT機器の活用を研究方法の重点とした。仲間と共に何度も声に出して読み、タブレット端末を用いて自分たちの読みを聞き返しながら音読を進めていくことをとおして、古典作品に出てくる言葉の響きやリズムに興味を示し、自ら進んで音読することを楽しむ子どもの姿を見ることができた。

キーワード：小学校、古典、音声表現、グループ学習、タブレット端末

1. 研究目的

本研究は、小学校において古典学習への意欲を喚起する授業づくりを目指すものである。

2016年度の実践研究においても、学習意欲を高められる古典学習の単元づくりを行った。子どもにとって自然な学習展開にするために、前単元とつなげた学習展開にすることにより達成することができた(湯浅、2016)。また、子どもが主体的に学ぼうとするには学習の動機づけとなる導入が重要であることが分かった。一方で、声に出して読む部分が少ないことが課題となった。しかし、言葉の響きは古典作品の大きな魅力の一つである。

そこで、本稿では、2018年度5年生における「心に響く古典を表現しよう」(主教材「古典の世界(一)」平成27年度版光村図書五)の実践から、子どもが自ら進んで古典を声に出してみたいくなるような授業づくりについて考察する。

2. 研究方法

古典作品を読み、グループの仲間と一緒に音読したり、録音して聞き直したりする活動を行うことで、古文の言葉の響きやリズムを楽しもうとし、古典への関心意欲を高めることができると考えた。

子どもから「古典って楽しい」という思いを引き出せる学習活動とするため、(1)グループによる音読、(2)ICT機器の活用に重点を置いて研究を行った。

2. 1. グループによる音読

音読への意欲が高くない子どもがいる実態をふまえ、個人での音読に加え、グループで音読するようにした。

「竹取物語」「平家物語」「徒然草」「おくの細道」の

中から、グループで音読の練習をするものを1つ選ばれる。仲間と一緒に活動することで、音読への関心が高まり、子どもも何度も読んだり、1つを選ぶために古典作品の魅力について話し合ったりすることができるようになった。

2. 2. ICT機器の活用

音声表現では、ICT機器を有効に活用することができる。本実践では、NHK for schoolの動画コンテンツとタブレット端末を活用した。

2. 2. 1. 動画コンテンツによる古典作品との出会い

教科書に取り上げられている「竹取物語」「平家物語」「徒然草」「おくの細道」の冒頭部分を主教材とした。NHK for schoolの動画コンテンツを活用し、まずは耳から作品に出会わせた。

最初に出会わせた「竹取物語」では、一枚の挿絵を提示し、それを見て気づくことを話し合った。その中で作中の言葉にも注目し始め、自然と古典の言葉を声に出し始められるようにする。そして、教科書の本文を読み、「ここが言いにくい」「言えた」という言葉を引き出し、「言えるようになりたい」と何度も声に出してみる姿を目指した。

2. 2. 2. タブレット端末で自らの音声表現の省察を促す

タブレット端末を用いて音読を録音し、自分の読みを確認しながら何度も読もうとする姿へつなげた。また、単元の前半と単元終末に子どもたちの音読を録音し、自分の読みを比べた。

録音に当たっては、学習支援アプリを使用した。本校では、タブレット端末が、学年で共有の30台が配置

されている。使用した学習支援アプリは、操作が子どもにとって比較的容易で、クラウド上に個人のフォルダがあるため、簡単に自分の記録したものを聞き返したり、聞き比べたりすることができた。

グループ学習の際には、予めグループに1台ずつ渡すのではなく、教卓に置くようにし、子どもが必要なときに使える環境にした。子どもたちは、グループ学習をする中で録音したいと思ったときに手に取れるようにした。

3. 授業の実際

3. 1. 本単元の学習過程

本単元「心に響く古典を表現しよう」は、次のような流れで行った。

第1次 ①1枚の絵から古典の世界を知ろう。

第2次 ②「竹取物語」をグループで音読しよう。

③「平家物語」「徒然草」「おくのほそ道」をグループで音読しよう。

④4つの古典作品から、グループで音読するものを選ぼう。

第3次 ⑤5A古典暗唱大会をしよう

第5時は、「グループ音読発表会をしよう」と計画していたが、子どもたちの学びの様子から、個人による暗唱を行うことにした。

3. 2. 第1時 1枚の絵から古典の世界を知ろう

インターネットサイトNHK for school内の「おはなしのくにクラシック」にある動画「竹取物語」より、教材となっている部分の朗読を聞くことから始めた。古典の言葉の響きに出合う時間であるので、音声を中心にしたいと考え、まずは映像を映さずに音声のみ聞くようにした。朗読が始まるとすぐ、「これ、知ってる」「昔話や」と、つぶやきが聞こえた。1回目を聞き終えた後、聞こえてきた言葉を問うたところ、「竹」「光る」などが出てきた。他にも「文末が『ありけり』になっている」と発言するなど、古典をすでに知っている子どもも数人いた。

その後、2度目は映像も見ながら鑑賞した。朗読の後に続く解説動画も見せた。そこでは1000年以上前に書かれた、日本で最初の物語と言われていることなどが紹介されていた。

そして、教科書の「竹取物語」のページを開いた。その中の数枚の古典作品の絵から、「竹取物語」の絵を拡大したものをホワイトボードに貼り、気づいたことを話し合った。

2回目の動画鑑賞後、一人の子どもが「あんな言葉、よく言えるなあ」とつぶやいていたことを取り上げ、自分たちにも言えるかなと投げかけた。子どもたちは

教科書を開いて読み始め、「ここが言いにくい」「言えた」と何度も読んでいた。(図1)



図1 音声を聞いて自分でも読んでみる姿

3. 3. タブレット端末による録音

単元の序盤と終盤で、個人の音読を録音し、単元の終わりにには自分の読みを聞き比べた。

また、第2次では「平家物語」「徒然草」「おくのほそ道」を、NHK for schoolの動画コンテンツを利用して鑑賞し、音読表現に挑戦した。「竹取物語」「平家物語」「徒然草」「おくのほそ道」からグループで1つ選び、録音をして自分たちの読み方を確かめながら練習を重ねた。

3. 4. 第4時 4つの古典作品から、グループで音読するものを選ぼう。

前時に一人の子どもが「おくのほそ道」を読んだ際、「生涯」という言葉だけが高く聞こえた。そこで教師が理由を尋ねたところ、「生涯は、一生、人生みたいな意味だから、一番大事な言葉かなと思って、わざとそう読んだ」と、意図的に声の高さを変えていることについて話した。そのように、自分の工夫を加えることも表現の一つであるということ共有していた。

以下に、第4時の授業記録を示す。3、4人グループで読む作品を話し合って決め、教師が指名したグループが音読をした後の場面である。(図2)

(授業記録より)

T: 聞いてみて感想は?

あいか: みんなの声が大きくて「竹取物語」をみんなに伝えたいというのが伝わってきた。

かいと: 声がそろっていて、伝えたいって気持ちが伝わってきた。

T: 3班はどうして「竹取物語」を選んだか教えてください。

ゆうこ: 何個もあるけどいい? 理由は簡単に言ったら、今の時代にやけど、1000年以上昔にできてるけど受け継がれているから。昔風の言葉やけど親しみや

すい。

T：今の話聞いて、質問したいことはないですか。

さとる：親しみやすいってどういうところが親しみやすいのか。

ゆうこ：他の作品は読み聞かせしてもらったことない。たぶん。

T：「竹取物語」はしてもらったことがあるってことかな。

ゆうこ：「竹取物語」は現代文で読み聞かせしてもらった。ほぼ同じやし、読んできてもらっている方が親しみやすい。

T：読んできてもらったから親しみやすいってことね。

T：どの言葉がいいなと思うかな。

しょう：「ありけり」とか「つかいけり」とかが昔風の言葉みたいでいい。

T：（つぶやきを拾って）他の作品も同じように昔風で言葉でいいなって思ったのはあったの。

たける：「平家物語」なんやけど、自分の班で選んで、その理由が「猛きものもついに」の「猛き」。今では使わないから選んだ。これも昔の言葉でいいなって話になったから。



図2 グループでの音読をみんなで聞く

4. 授業の考察

4. 1. 導入について

授業の中で、動画から聞こえる読みをまねしようとし、「言いにくい」「言えた」と口々に話していたことから、古典の表現への興味関心をもって学習に臨む時間となったと言えよう。

本学級ではほぼ毎日「宝物ノート」（日記）を宿題にしている。この日の宝物ノートには、国語の授業のことを書いている子どもが数人いた。普段、国語の授業のことを題材にして日記を書く子どもはいない。よほど楽しかったと見えた。また、音読の宿題にも食いつきがよく、あっという間に覚えてしまったという子どももいた。

宿題の音読を家庭で聞いた保護者からも反応があり、「懐かしい」「一緒に読みました」「中学、高校では暗記させられて大変だった記憶がありますが、小学校でこんな風に読めるのは楽しそうですね」と綴られてい

た。

導入で古典に対する興味関心を高く持った子どもたちは、この後の学習でも、進んで声に出して読んだり、今ではなじみのない言葉も何度も読んだりして古典作品に親しむ姿が見られた。

4. 2. タブレット端末を用いて、グループで音読の練習をする

単元の序盤と終盤での個人の音読や、グループで音読の練習をする過程で録音をした。それにより、各作品中のおもしろさに着目し、声に出して言葉のリズムや響きを確認したり、タブレット端末で音声を録音するために何度も読んでみたりすることで、古典の表現のおもしろさに気づくことをねらいとした。また、自分や友だちの読み声を聞くことで、自分が読みたいと思っているイメージに近づいた音読ができているか、という自己との対話、省察も生まれると考えた。

子どもたちは、歴史的仮名遣いや現代では使わない言い回しに苦労しながら、“すらすら”読めることを目指して個人での練習、その後のグループで読む練習に取り組んだ。当初、子どもたちの意識は、グループで息を合わせて、ずれないように読むことに集中していた。次第に、お互いの読みを聞き合いながら、よりよい表現にしていこうとする姿もみられるようになった。

仲間と一緒に活動することで、音読への関心があまり高くない子どもも何度も読んだり、1つを選ぶために古典作品の魅力について話し合ったりすることができるようになった。必然的に、教科書に書かれている現代語訳や解説文を読む姿につながった。

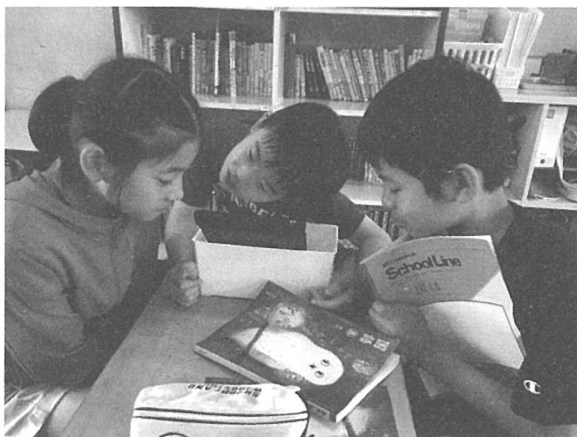


図3 録音した音読を聞いて確かめる

5. 成果と課題

グループ学習で行うことにより、子どもたちはどの古典をグループで発表するか決めるために、それぞれの作品のよさを熱心に話し合っていた。また、それにより、一人一人が自分の選んだ作品への愛着を強め、「お気に入りの作品」として進んで声に出していた。

しかし、せっかく自分のお気に入り作品を持っているにもかかわらず、グループで一作品に選ばなければならず、自分の作品を読むことができなかったことにより、音読への学習意欲がさらに高まったとは言えなかった姿が見られる。

単元終了後、30人全員が「古典は楽しい」と話した。休み時間に、友達と並んであるきながら口ずさんでいた「竹取物語」。「平家物語」の言葉のリズムを感じ、体を動かしながら読み、徐々にそれぞれが考えて振りを付け始め、互いに見合う姿。動画コンテンツで視聴した「徒然草」の読み方を真似る姿。グループ学習の後、「今度は自分が好きな古典を選んで、暗唱大会をしようよ」という声が挙がり、全員の賛同を得た。(図4)

(単元終了時の感想文)

- ・グループでできた古典は、わたしが自分で読みたいなどか、これ好きやなどか思っていたのところが古典だったので、グループで学習したからその古典も覚えられてよかったなと思いました。1つ1つの古典を、時間はかかるけど練習して覚えていったら4つの古典がかんぺきになると思います。古典はむかしの言葉なのでむずかしかったけど、それを練習するのが楽しかったです。はじめにタブレットで録音したのは全然上手にいつてなくて、たくさん練習して、今のほうがうまくなっていたと、わたしは思いました。
- ・今日の6時間目に古典を録音しました。ぼくは平家物語を選んで読んだんだけど、ぼくはふりつけを考えたのと合わせて読みました。ふりつけがすごくおもしろくて、Aちゃんが、録っているときにずっと笑っていて、自分でも笑ってしまいました。平家物語の言い方とダンスがすごく合っていていいと思いました。
- ・ぼくは、古典が好きになりました。なぜかという、最初にやったときに、つれづれ草を読んでみたら好きになりました。それで、国語の授業とか家での練習とかも楽しかったし、古典をやっていたら、たのしくて、わくわくしました。録音したのを聞いてみたら、まえのより、今のほうがいいとわかりました。やったら楽しかったし、この勉強ができてよかったです。
- ・授業で最初はむずかしくてびっくりしました。宿題で、言えたら気持ちがいいと思って、10回、20回と練習しました。古典はおもしろいので、またやりたいです。聞いて、前はきおくするのでせいいっぱいだったけど、今はこんな感じに言ったら心にひびくことができてよかったです。

課題としては、次のような点があげられる。

まず、暗唱大会は個人で行いたいという子どもたちの声にもあったように、単元の進め方については課題が残る。個人でお気に入りを持っておきながら、第4時においてグループで1つしか音読するものを選べな

かった。それにより、一部の子ども強い主張により決まってしまうたり、自分のお気に入りの作品に決まらなかったことで音読への意欲が一時的にでも下がってしまったりした子どもがいた。また、自分のお気に入りであれば見られたであろう探究が、グループでお気に入り以外の作品を選ばれたことで見られなくなったと思われる子の存在もある。

また、探究、省察についても、より充実させられる方法があったのではないかと考える。グループの音読をタブレットに録音し、それを聞く際には、古典の言葉の響きやリズムより、「グループで声をそろえる」といった部分に目を向けている子どもたちもいた。子どもたちとしては探究、省察、探究をたどっていると言えるが、その質について再考して研究を行う必要がある。

いずれにせよ、音読自体には良い印象を持っていない本学級の子どもたちが、お気に入り古典作品を持ち、古典を声に出すことに親しみ、学級での暗唱大会に向けて進んで練習し、本番を楽しんだ。そのような姿からは、子どもたちの古典への学習意欲の高まりに関して、一定の成果が表れたと言えるのではないだろうか。今後も、子どもの学習意欲を引き出す授業づくりを行っていきたい。



図4 学級で暗唱大会を行い、一人一人がお気に入りの古典作品を暗唱する。

参考文献

- 高木まさき監修「光村の提示型デジタル教材シリーズ 音読・暗証・読み聞かせ わくわく古典教室 小学校高学年用[古文・漢文編]」(2009) 光村図書
- 湯浅明菜『学習意欲を喚起する小学校古典学習～5年生実践「古典を読んで、『イイね』あなたは共感できるかな、できないかな』より～』(和歌山大学教育学部附属小学校紀要第40集) (2017) 和歌山大学教育学部附属小学校

参考ウェブサイト

- NHK for school「おはなしのくにクラシック」